

「明けましておめでとうございます」以前にも書きましたが、日記なるもの、オレの人生で、“三日坊主”の典型で、今年こそ始めようと心して決め、それこそ3回ほどで終わったことが、今までの間に、5回6回あったかな。振り返ると、この“えかきのぼやき”今年で5年目のようだ、よく続いたものだ、これからもしばらくは続けます。

林望著<リンボウ先生のうふふ枕草子>この本を年末から枕元に置いて少しずつ読んでいる。清少納言著：枕草子は、鴨長明著：方丈記、吉田兼好著：徒然草と日本三大随筆と称される。清少納言は中宮（天皇家？）定子に仕えた女官。平仮名を中心とした和文で綴られている。と解説が続く。「春はあけぼの」と聞き「おお あれか知っている」程度の知識しかないが、この「うふふ」を読むと、俄然その面白さが迫ってくる、初めて読む枕草子が、「うふふ」ではとも思うが、いくつか先生の話、エロチックな清少納言を紹介します。

◎「昼寝」婿取りして四五年まで産屋のさわがせぬ所も、いとすさまじ。おとななる子どもあまた、ようせずは、孫（むまご）などもはひありきぬべき人の親どち昼寝したる。かたはらなる子どもの心地にも、親の昼寝したるほどは、より所なくすさまじうぞあるかし。

訳：婿殿を迎えて、4.5年も経つのに産屋の沙汰もないのはさぞがっかり。またもう大人になった子供が何人もいる、それどころか孫までいる、そんな夫婦が昼間っから同衾している。わきでそれを見ている子供からすれば、近寄ることもできない、何とも心すさむ思いた。男はともかく、女はおばあちゃんになっているのだから（これは男女均等法に違反だねえ）、そろそろ聞事めいたことは卒業してもらいたい。昼寝は、セックスだとは、けっさくだ。

◎「精進潔斎」寝おきてあぶる湯は、はらだたしうさへぞおぼゆる。十二月（しわす）のつごもりのながあめ。「一日ばかりの精進潔斎」とやいふらん。

訳：せっかく寝ようと思ったのについつい欲望に負けてしまって、事後はもう一度湯あみに行かなくてはいけない。よしときゃよかった。大晦日は正月の神迎えの準備としていっさいの汚れを祓って清浄な物忌みに過ごさなくてはいけないのに、してはいけないと思うと、ますますしたくなる理不尽な人間の欲望、ついつい禁を破って、セックスをしてしまった。

◎「口喧嘩のあと」なま心おとりしたる人の知りたる人と、心なることいひむつかりて、ひとへにも臥さじと身じろぐを、ひき寄すれど、強いてこはがれば、あまりになりて、人もさはれとて、かいくみて臥しぬる、後に、冬などは、単衣ばかりをひとつ着たるも、あやにくがりつる程こそ、寒さも知られざりつれ、やうやう夜の更（ふく）るままに、寒くもあれど、おほかたの人もみな寝たれば、さすがに起きてもえいかで、ありつる折にぞ寄りぬべかりけると、目も合はず思い臥したるに、いとど奥のかたより、もののひしめき鳴るもいとおそろしくて、やをらよろぼひ寄りて、衣をひき着るほどこそむとくなれ。人はたけくおもふらんかし、そら寝して知らぬ顔なるさまよ。

訳：女の方から愛想が尽きてきた男と口喧嘩をして「こんな奴と一つ布団に寝るのはいやだわ」わざと離れて寝ようとする。「なあ ちょっとこっちへ来いよ」と男が引き寄せようとするが「冗談じゃないわ 嫌だ嫌だ 一緒に寝てやらない」「そっちがそうなら 勝手にしろ ばかやろう」と男は自分だけ温かい掛けものにくるまって寝てしまう。自分は単衣の薄物しか着ていない、頭に血が上っているうちはよかったが、だんだん夜が更けると寒い。寒い、真夜中で家じゅうが寝てしまっている。「ああ こんなことなら 先ほど 男が呼んだときに 一緒に寝ればよかったものを」まんじりともせず我慢していると、どこか家の奥からギギギと怪しげな物音がする。恐ろしくなって、男のそばまでよろめき、奴めが一人占めしている掛けものにむりやり身体を差し入れる。その時の最悪なるかっこうのわるさと言ったら・・・男もむきになって、タヌキ寝入りで知らん顔をしている。いくら強がっても女は女、こういう身の毛もよだつような夜の闇の恐怖にはやはり弱い。一時は懇ろな恋仲であったが、たいした男じゃないとわかってきて、軽侮の心が起こってきた。しかし物の怪などの横行する丑三つ時、こんな男でも、ちょっと頼もしい感じがあり、冬の寒さは人肌で温めあうのが最も快い。リンボウ先生：優しい女らしい清少納言に嬉しくなってしまう。

David Waltner-Toews デイビッド・ウォルトナー著『The Origin of Feces 排泄物と文明』昆虫のフンコロガシのイラストが表紙を飾っているのですが、この本を借りてきたが、内容は糞の話でした。「うんこ 正月早々 くだらんことを」と皆様からおしかりを受けるだろうね、と苦笑。「フン」と呼ぶのか「クソ」と呼ぶのか？

「男の子は腹が弱い」とよく言われるがその例にもれず、ずっと下痢で悩まされてきた。今から考えると寝相の悪さ、夜中に寝返りを打ち布団を蹴飛ばし、ハッと気づくころには身体が冷えている、腸が冷えゴロゴロというのかもしれない、少年時代は軟便の日が続いた。すましていってられるうちはいいが、通学途中の電車の中や歩いている途中に、グルグルがくと大変である。目は一点を見つめ、歯を食いしばり、最寄りのトイレの場所を考える。こういう経験は数え上げればきりが無い、日々通う道々のトイレの場所は頭に入っていた。それでもしくじり「漏らしてしまった」この表現はたいていの場合は小便に使い、大便の場合は「うんこを包んでしまった」と言っていたのかな。大人になると、寝相に加え、大量のアルコールが加わり、還暦ぐらまでは少年時代と変わらない状態だった。還暦を過ぎたあたりから、アルコール量が減ってきた、寝相が良くなったわけではないが、昔のように寝ることに集中できなくなったというような理由が加わり、便秘ということを知った。「便秘は いやだ 苦しい」下痢気味のものにとってうらやましい言葉は聞きなれていたが、「なにをいう ゴロゴロ ピー」よりはいいと笑い飛ばしていたが、便秘というやつは確かによくない、苦しい。排泄しなければいけない物質を2日3日と体内に置いておくのだからね。

山に川、自然の中にはあちこちに糞が在る。鳥類は“総排泄腔（くう）”という出口が一つあるだけ、水まじりの固形物を落としている。「ならば 鳥は 生殖は」排泄の事ばかり考えていたので、ネットで「鳥の 生殖は 交接は」と載っているのを見て、「動物のオス 排泄器は 生殖器でもある」と気づかされたが、今回は排泄の話で忙しい。

山や川で、ヒトの糞を見かける、白い紙が添えられている、これはいやだねえ、よくない。アウトドア一派のものとしては、うんこの作法を教えなくては。穴を掘ってそこに糞を入れる、紙も穴を掘って入れるか持ち帰る。四半世紀前のある山小屋、トイレは谷に向かってたれ流し、谷まで長く汚れていた。他の小屋も似たようなものだった、その光景を見てぞっとしたものだ。最近では、分解槽のあるトイレ、時間をかけ浄化する仕組みが多くなってきた。

登山をしていると、道の上に糞がある、「これは ヤツの 糞 まだ新しい」なんてわかるようになってきたものもある。先日も猪のものを見つけた。テンやらオコジョやらイタチの違いといわれるとわからない。

屎尿処理施設、これはすごい。日本人の平均大便が一日 200 グラムだそうだ。人口が 20 万 30 万の都市、日々の糞尿がその他の排水とともに処理され、安威川に流されている。まだオレが少年時代、いつも来る百姓のおっさんが、肥えを汲みコインを置いて帰った。前後の桶を肥えで満たし、両天秤棒で体を揺らして歩いていた。人糞を食料品である植物の肥料に使う文化、これはすごい。（肥え とは 便所に溜まった 糞尿のことである）

デイビッド先生：排泄物は、部分的に消化された食物に、バクテリアと体液を加え丸めたものだ。私たちが食料として利用した動植物が、脂肪とタンパク質と炭水化物に、ぐちゃぐちゃに混ざり合ったものだ。国連食糧農業機関によれば、2007 年アメリカ 5700 万トン・アルゼンチン 1500 万トン・ブラジル 1100 万トンのトーマロコシを輸出した。輸入したのは、日本 1660 万トン・韓国 860 万トン・メキシコ 790 万トン・スペイン 660 万トン。上位 3 か国だけで 830 万トンのタンパク質に相当する土壌の栄養分と同量の水を消失したことになる。言い換えれば何百万トンのタンパク質・炭水化物・脂肪を構成する炭素・窒素・酸素・水素・リン・水・その他の化学物質が世界中に輸送され、それを利用した、ヒトや動物の排泄物が、別の生態系に持ち込まれる。

先生の話は、糞の処理、利用、害の話と多岐にわたる。「糞」となると、「臭いものにふた」ではないが、なかなか話をしない、調べもしなかった。「なんと 人糞を 食料生産現場 農地で使うとは」「人糞こそ 最高の肥料 このシステムで 日本の最近までの都市での 人糞処理サイクルは 上手く 回転していた」話は尽きない。

京都の西を洛西という、ここは大原野。京都市内の西大路より西を洛西というらしい、有名な嵐山や嵯峨野。古代から皇族、貴族、武士の別荘地があった衣笠、御室。大原野（向日市・長岡京市）あたりを含むこともあると書いてある。地図を調べると、大原野は京都に近いところだと思っていたが、何度か登った、あのポンポン山が大原野のすぐそばにある。オレの頭の中の地図では、ポンポン山は高槻の奥、大原野はほとんど京都に近いところ、まったく違う場所だと思っていたので、頭がこんがらがりながらの再発見である。向日市・長岡京市は我が家の近所ながら、京都の他の場所に比べ知名度が低く、若いころからあまり知らなかったが、ポツリポツリと何度かは来ている。秋にも紅葉の季節に光明寺を訪ねた、モミジで真っ赤だった、ここだったのかと納得、ハイキングの距離の場所である。

朝から晴れのような曇りのような、うっすら明るい曇り空、気温は温かい。そういえば毎年、北の方で雪が降る、北海道はもちろんのこと、東北や北陸で大雪が降る、「交通機関が乱れている」「道が寸断された」というニュースが流れるが、今年はそんな話は聞かない、大雪はまだ降っていないようだ。毎年雪かきに行かせてもらう金沢市に近い南砺市も、雪の話は聞かない。「正月に雪がないなんて」と驚いていた話は半世紀前のことらしい。

花の寺「勝持寺」桜と紅葉のモミジが有名らしい。勝持寺の横を通って竹藪の中、コンクリートの坂道を下ると、左側に「茶屋」と書いてある。細い粗末な橋を渡ると、鉄パイプ製の朱塗りの鳥居、「大原野神社」、この道は裏道、正面は石段・石畳、立派な門がある。大原野神社、別称「京春日」783年桓武天皇が長岡京遷都の際、藤原氏の氏神である奈良の春日大社の神々をこの地に祀ったらしい。なるほど、社の姿は奈良の春日大社のミニ版、檜皮葺きの焦げ茶色、朱色の柱と梁、緑色の格子窓、漆喰の白色、金具の金色があちらこちらに。石の灯籠は比較的新しいものから、緑の苔むした古色蒼然としたものまで数が多い、数の多さは寄進によるものか。「狛犬は」と見ると、さすが春日大社、狛犬も犬ならぬ鹿の一对が鎮座。よそでなら龍の口から水が噴き出る手水の本体も鹿の姿、奈良の春日大社の狛犬や手水の水の吹き出し口、鹿なのかそうでないのか、後日探検してみよう。奈良のシカは、神様だそうだが、昨今のシカの評判の悪さ、特に山のふもとの里山に暮らす人々は「害獣」と憎んでいるようだ。

長岡京：784年平城京から遷都、794年平安京に遷都のわずか十年間の都だったそうだ。幻の都とされていた。難波の宮は戦争末期、陸軍敷地で古代瓦の発見を機に、戦後、山根先生が発掘した。同様に、長岡京も1954年に初めて発掘が開始された。長岡京の建造物は、難波の宮や他の宮の建造物を移築したので、かなり完成した姿であったらしい。平城・平安と並ぶぐらい大きな京域を持つ都であったらしい。反対勢力、都でなくなる奈良の人々、造長岡宮使の暗殺、飢饉・疫病、川の氾濫などが続き、たった十年で平安京に遷都した。

金蔵時：歩けば50分と書いてある、なんてことはない、行ってみようと歩き出した。アスファルト舗装の坂道、車はほとんど行きかかわないが、空模様が怪しいと思っているうちに本格的に降り出した。先ほどから、1キロと表示が出ているが歩いて歩いても歩いても着かない、不動明王が祀られたお堂にもう1キロの表示が出ている。「えい 今日はいくらで 勤弁してやるか」普段の健脚なら、どおってことない距離だけれど、ひざいたの今、養生をしていない足には少しこたえる。（養生とは、湿布・サポーター・カイロの三種の神器である。）金蔵寺の説明版に、「今昔物語にも紹介されている寺」と出ている。九州で山岳修行をしていた行全の枕元に「汝 都の西方 小塩山の浄地に 一字を 建立せよ」とのお告げがあり、はるか九州からこの乙訓へやってきて、金蔵時を建立した。1200年前のこと、寺としては、古刹、古く由緒ある寺らしい。

標高が、200Mとか300Mとかあるのだろう、向こうを見ると、街並みが続き、その向こうに山並みが続く。霞んでいる、めだつた建物が無い、見知ったものもない「どうも 見えているのは 宇治の街並み ではなかろうか」山々は信楽に続くものなのか、普段の山のカバンを持っていたなら、磁石が入っているのだけれど、車の中に置いてきた、残念ながら向こうがどこか定かではない。お堂の屋根の下で、おにぎり、リンゴのひとかけら、ミカン一個をほおぼり、ペットボトルの茶を飲んだ。谷筋を水が流れる。斜面に作られた畑がある。畑には今の季節、何も育っていない、畑の斜面は草刈りが終わったばかりなのか、緑がかすかに交る枯草色、雨の湯気がふらり上がっているようで、陽炎のようにも見える。雨がやみ、向こうの空に太陽らしきしるし、熟した小粒のカキの実が点を置いたようにぼつりぼつり。この辺り、家の近所、ふらりと歩くには、かっこうの場所を見つけたと喜んでいる。

淀川右岸の河川敷を自転車で下流に向かって走っている、いつものように鳥飼五久から土手の中に入る、一番目の目的地は阪急南方駅付近、次に難波まで行き二つの用事を済ませたい。天気予報では大型寒気団がやってきている、今日はまだ晴れの予報だったが、午前中の今でもすでに寒い、風も強くはないが向かい風、草木がそよぐ程度だけれど、風に向かって走るのはしんどい限り。天気は晴れている、お陽さん照り横の草木の影も出ているが快晴ではない。力を入れて走る、背中がほてり汗が出る、冷たい風が体に伝わりちょうどいい塩梅なり。

昨日、今日と続けて訃報のメールが入ってきた、十代の頃と同級生のふたり、男と女、二人とも同じクラスだったので、話したり、笑ったり、という顔つきが頭の中に浮かんでくる、二人とも40年50年会ってなかった。何十年も経つと、どんな顔つきに変わったか、どんな人柄になったのか、ということはわからないけれど、同じように話したり、笑ったりしていたんだろうね。「七十歳という歳は 一つ寿命が尽きてもいい歳である」と考えなくては。

風速が何メートルなのかはわからないが、草がそよぐ木の枝が揺れるという程度、「たいしたことはないんじゃないの」というぐらいだが 自転車が重いねえ 河川敷に入ってまだそんなに進んでいない 疲れるねえ」

川幅は800Mぐらい、橋はいくつあるのか、鉄道は別にして、山崎の三川合流から、枚方大橋・淀川新橋・仁和寺大橋・鳥飼大橋、すいすい出たが、ここからはあやふやだ。豊里大橋・城北大橋・長柄橋・新淀川橋・十三大橋・新十三大橋・淀川大橋・伝法大橋、あとの方は半分しかわからなかった、計12本ぐらいか。最近でこそ土木技術が進み、簡単に橋が造られるが、子ども時代、木造の鳥飼大橋が洪水で流され、しばらくの間は木造の小さい渡し船が行き来していた。鳥飼五久のあたりにも橋がなく、やはり渡し船が行き来していた、何度も乗った。

橋の上には車がいっぱい、数珠つなぎで左へ右へ、だが土手の中は都会とは思えない景色、空が大きく広がり、すぐそばには水、川幅も広く流れているのかいないのか、ゆっくりたっぷりの水がふわり沈んでいる。ポンポン船の音が聞こえる、川には時々調査整備目的だろう役人船が往来する。現在は荷や人の輸送はない。明治までは船は重要な交通手段だった、オレも何年か前、目から鱗が落ちたが、それこそ昔は海上輸送が主要な交通手段、街道を歩く、馬車や牛車で荷を運ぶ、その量の、一桁二桁多い輸送能力が船にはあったと教えられた。京の都から大坂へは淀川を通過、京の都から北陸へは琵琶湖を通過、北海道や東北から日本海沿いに行く、新潟へ、富山へ、中国地方をまわって瀬戸内海を大坂へ、船が主役だった。教科書では半世紀前に習っていたが、街道が大事だろうと思っていた。

大阪湾に近づくと、水の流れが変わってくる、上流では水が流れている、上から下への流れが感じられた。大阪市内に入ってくると、海に近づいた、流れがストップし水がたっぷり溜まっているというような感じに見て取れる。歴史的に見ても、千年も前ならこの辺りはもう海だったのでは、上流から流れてきた土砂が積もり、どんどん中洲ができ、河口が伸びていったのでは。それとここ100年の埋め立てがますますそれを助長したのでは。この辺りはもう海まですぐだ。大きな空、たっぷりの水、草や木の緑、きれいだ、きもちがいい。最近の淀川河川敷は人の手で整備され、公園、駐車場、運動場、簡易トイレ、ゴルフ場と盛りだくさん、芝なのか草なのか、きちんと刈り込まれている。半世紀前の淀川は自然に任せ、人の手は入れていなかった。当時は、ワンドがたくさんあり、草が生え放題、時々農家の労働のために飼われていた牛が、ロープにつながれ草を食べていたのを思い出す。

スーパー堤防。国の指針として、大きな川の土手を、より高くより頑丈に、水害・災害に強い、何が起こっても大丈夫、という目的で進められていると聞く。この淀川も、相当部分の場所で、昔のものとは違う、ゆったりとした土盛り、なだらかな斜度、スーパー堤防が何か所かでできつつある。そんなことは無駄だ、膨大なお金をかけるべきものではない、と国会で議論があり、中止だ、いや続ける、とどういう結論になったのかは知らないが、部分的に昔のものが残っているなら意味がないねえ。ニュース解説者によると、日本の役所の考えは、ひとたび国家百年の計画を立てると、役所はそれをおいそれとは中止しない、肅々と推し進めていく傾向があるそうだ。オレは、自然災害は、国が守る、力づくで守る、というのは反対だ。自然災害はいつでもどこでも突然に起こる、災害による人的物的被害は防ぎようがない。これを最大限に少なくするために国家百年の計、巨大な設備を造るとするのは反対だ。いいかえれば、人的物的被害が起こるのも自然なことだと考えなければと思っている。「もし・・・」「なら・・・」もいいが、自然の大きさは、まだまだ人の力は及ばない、その力を受け入れなければ、と思っている。

小峯和明著<今昔物語の世界>毎度おなじみ、などとふざけたくなるほど今昔物語は面白い。この先生、「今昔物語の世界を 小さな窓から見つめていきたいと 思います」今昔物語集は、いつ誰が何のために作ったのか、今でもよくわかっていません。履歴のわかる登場人物や制作年代のわかる使用資料などから、およそ12世紀前半とされるにすぎません。作者も白河院の勅撰説や奈良の大寺院の学僧（先日の先生は一人の学僧説）などがあげられるにとどまっています。いずれにしても、一千話以上もの話を集めて書くわけですから、それだけ大量の紙が必要で、当時、紙は手漉きの和紙で貴重品でしたから、かなりの富や権力がなければできない事業だったでしょう。貴族なり寺院なりの援助がなければできなかったことは確かです。仮に奈良のお寺で編纂されたにしても、平安京の都世界の物語が中心にあることも確実です。今昔物語集は、あくまで当時の中心である京から全世界を見ようとしているのです。

○今昔物語集、12世紀に書かれ100年以上眠っていた。もっとも古い写本、鈴鹿本と呼ばれ13世紀に写された。またまた200年眠り、15世紀に鈴鹿本が発見される。記録の書き手が興福寺の僧。18世紀江戸時代に出版もされる。明治になって全巻活字で出版される。芥川龍之介がきっかけで評判が一挙に高まった。

○今昔物語集というが、竹取物語も宇治拾遺物語もほかの説話集も「今は昔」で始まるのです。

○今昔物語集は未完成に終わっている。先生：全31巻で、8・18・21は最初からなかった。計画されながら作れなかった。話の途中で中止や、表題だけで話がないものがある。欠巻、欠話、欠字などの欠損がいたるところに見られる。欠けているところに、かえって作り手の主体がはっきり表れているのです。完成をめざせばめざすほど、未完に終わらざるをえない、そういう自己矛盾をかかえてしまったのが今昔物語集という作品だろうと思われまふ。

○今昔物語集 天竺（インド1~5）震旦（中国6~10）本朝（日本11~31）これは12世紀の当時、全世界を意味した。

今昔物語は、お釈迦さんの話からはじまります。オレ：釈迦の生涯と聞き、知っているようで知らないので紹介。

釈迦すなわち仏の伝記を仏伝といいます。釈迦は仏教をひらき、教えをひろめたことで知られています。仏教では仏はたくさんいるので、釈迦とか釈尊と呼んで区別します。お釈迦さんは今でも、四月八日花まつりで誕生を祝い、以前はよく象の山車を曳いてねり歩いたり、甘茶をもらったものでした。私も子供の頃、お稚児さんの恰好をして山車を曳いたことがありました。涅槃の二月十五日は、あちこちのお寺で涅槃会の法会が行われていました。

今昔物語集は釈迦の伝記「仏伝」をはじめ本格的に体系的に物語ったテキストでもあったのです。末の世を生きる人々がどうすれば救われるかを、仏の追及を通して、真剣に追求しようとしていたと考えられます。

○其ノ樹の様は、上より下まで等しくして、葉しだりて枝に垂れ敷けり。半ば緑なり。半ば青し。其の色の照りかかやける事、孔雀の頸の如し。夫人樹の前に立ちたまひて、右の手を挙げ、樹の枝を曳きとらむとする時に、右の脇より太子生まれたまふ。大の光を放ちたまふ。

もと天界にいた釈迦は、仏ではなく菩薩でしたが、寿命が過ぎて人間界に生まれ変わることにになります。インドのカピエラ国の浄飯王を父に、摩耶夫人を母とすることに決め、摩耶の胎内に宿ります。摩耶は夢に白象に乗った菩薩が、虚空から来て右の脇から胎内に入るのを見ます。摩耶は二月八日、別荘のルンビニ国の無憂樹下に出かけ、美しい枝葉に右手をかけようとする、右脇から太子が生まれ、光を放ちます。太子は四方に七歩ずつ歩きますが、歩むごとに蓮華がおのずと出てきて足を受け取ります。ここで「我生胎分尽がしょうたいぶんじん」いかの偈を唱えます。普通は「天上天下唯我独尊」と唱えるとされています。龍王たちが水を吐いて太子の身を洗い、太子は大いに光明を放ち、あまねく三千大世界を照らし出します。太子はやがて17歳に成長し、ヤシヤダラを妻に迎えますが、まったく夫婦の契りをかわすことがなかった。太子は別荘の園に出かけ、東の門から出ると老人に会い、人の老いを知る。南の門から出ると病人に出会い、病を知る。西の門から出ると、死者に会う。北の門から出ると、僧がやってきて、解脱の道を説き、虚空に昇り去ります。19歳の時に城を出て出家。6年間の苦行の末に苦行だけでは悟りが開けないことを悟り、菩提樹の下で瞑想する。魔王たちがいろいろ邪魔をするのを、ことごとく撃退し、やがて煩惱を絶ち、菩提の道を与える。次々と教えをひろめ、弟子や信者を増やし、教団を形成。やがて80歳の生涯を終え涅槃に入る。

友人のカメラマン、中西さんとの会話から。オレと彼は同じ 70 歳。オレは大阪の郊外、まだまだ田んぼが多かったところで育った。中西さんは写真機屋さんの息子、大阪のど真ん中、心齋橋まで徒歩 10 分というところで育った。我々が少年時代、日本国民は飢えていた。敗戦直後に生まれた。アメリカ軍の爆撃で焼かれた大阪で生まれた。大爆撃というが、5.6 歳の記憶では桜ノ宮の廃墟以外は、焼けつくされたと思ひ当たるような場所は見たことがない。それとも、たった 5.6 年で鉄道線路や、車が行きかう道路、ビルや住宅が修繕されたのか、この辺りは検証しようがない。とにかく、復興の真ただ中、汚い街、汚い家、活気と人いきれだけは覚えている。当然、旨いものなど口にできない。あれが食いたい、夢にまで見る食いもの、そんな時代が終わり、大人になって旨いものも知りだしたが、貧しい時代のそんな食の面白話をしてみたい。グルメと書きたいところだが、世の中“旨いもの”狂想の時代、「何処の何が旨い」「これは最高」と馬鹿バカしい話とその写真が満載の今の日本、オレなりに仕様もない話をしてみたい。

- 「最近 ナッツにはまってる 美味しい」マカダミアナッツ、ヘーゼルナッツ、知らんねえ。
- 「朝のトーストに 漬物はさんで 食っている」「へええ そんな」「でも ピクルスは はさんでるねえ」
- 幼稚園児の頃 ご飯たべなかった 祖母が思いあまって“砂糖マブシご飯”それをパクパク食べてた記憶がある。
- 小学生低学年の頃から、鮎寿司、ブルーチーズ、なんのためらいもなくパクパク
- 昭和 24 年頃：寝入ってしばらくすると襖の向こうで人の気配が。耳を澄ますと、ビフテキ（当時はなぜかステーキとは言わず）を焼くジュージュー音がする。ついでに牛脂が焼ける美味そうな匂いまでもが襖越しに漂ってきた。隙間から覗くと親父の誕生日らしくて、ちゃぶ台には絵本で見たバナナまでもが。ビフテキとバナナ、それも両親が二人だけで食うてけつかる。ついに我慢の限界がきた。「大人二人だけが 何でや！」悔しさが泣きべそになり、それが嗚咽に変わった。察した親父はわしを膝の上に乗せ、ビフテキを小さく切ってわしの口に入れてくれた。泣きじゃくりながらもビフテキの味を知った。
- 30 年近く前、ドイツとスイスへ行った。フランクフルトからレンタカーでアウトバーン。腹が減ったので食堂に入る。目にするもの全てが珍しかった。ソーセージ、チーズ、得体のしれんスナック菓子、どれもこれも美味かったけど、とりわけ“豚の血も一緒に練りこんだソーセージ”これは美味い。次の 2 日間もそれを食った。飽きることはなかった。3 日目くらいになると、さすがに食傷気味、トイレで出た自分の便が真っ黒やったのを鮮明に覚えてる。
- スイス：「フォンデュ 行ってこましたれ」美味そうとおもいきや、意外とまずい。けど、珍しいので食うには食った。ホテルに帰る途中で腹がゴロゴロ。「やばい 緊急事態や！」真昼間、周囲には多くの観光客がぞろぞろ「ああもうあかん」道端でとっさにしゃがみ込み、靴のかかとを尻に押し付ける、額には脂汗。しゃがんだ目の前に小さな雑草の花が咲いている。その花を興味深そうに観察するふりしながら、次々と襲ってくる便意をやり過ごす。夜叉みみたいな形相、額の脂汗、周囲の人の好奇な目つき。地獄のオイルフォンデュ譚はもう 2 年後のスイスのグリンデルワルドでも繰り返した
- 真冬の NY：夕方遅くの撮影が終わる頃には体の芯まで冷えた。冷え切った空腹には鍋焼きうどんが最高のご馳走。マンハッタンのだ真ん中にある日本料理屋で。ただ値段が高い、たかが鍋焼きうどん：\$25：¥三千元でっせ。香辛料大好き、マンハッタンのインド料理屋へ。「もっとスパイシーで 辛いもんないか？」と訳わからんスープを頼んだ。「ひりっ ぴりっ ヴィヴィっ」ナンで流し込む。スイスフォンデュ悪夢の再来がやってきた。
- 東海岸のシアトル市内の本格的な中華料理屋で食ったワンタン。これはほんまに美味かった。地元でも有名な治安が悪い場所があるので、ホテルに帰るときにはタクシーを呼んでもらう。市内で知り合ったタクシー運転手、(トルコ系移民) 彼は将来、カメラマンになる夢を持っていた。その運転手君に「ワンタン おごったるわ」と誘い一緒に行ったけど、彼はモスLEMだから、「豚とか貝が 入ってるから 食わん」と。「ほな ヤメとき」ところが、彼は辛抱たまず、「すまん 一口だけ 味見させて」と禁避を破った。その濃厚な味にノックダウンされたようで、「もう一皿」とご注文あそばした。

中西さんは、空撮が好きだそう。高所恐怖症のオレには信じられないねえ。

◎お日様が照っている、暖かい、愛宕山の登山口に向かって歩いている、愛宕山にはもう 5.6 年、冬季に一度は登りにきている。思えば最初にヒザイタを知ったのもここでした。5 年ぐらい前かな、嵐山の駅から清滝、月輪寺、山頂から水尾、嵐山と歩き続けた。「ヒザがおかしい」翌日には歩けないぐらいに傷んだ。慌てて隣の整形外へ、注射一本で、2.3 日間ぐずぐずしたが治った、という思い出。今日は、本当は、湖西の比良山、北小松から 2.3 時間登ろうと計画していたが、昨日一昨日、相当な雪模様、道路のライブカメラでも 161 号線、大津市のあたりは黒いアスファルトと道の横に白い雪、車も走っていたが、北の方は雪で白い画面しか見えない状態、「これは 車では いけないねえ 電車で行っても 登れないかも」というわけで行き先変更、愛宕山に登ることにした。

◎パイプをつたって、水が出ている、「これは湧水だ 旨そうだ」備え付けのコップで一口味わった。先ほど、おにぎりとおあんパンをいただいた。口の中にそれらの、あと味が残っている、アンの甘味、ごはんのもっちりを感じられる、ひと口飲んだ水はまわりの冷気に比べ温かい、地中から湧き出た水は極寒の季節には温かい。「えらそうなことを いうが この水の味は 中の下かな」なんて失礼なことをほざいてしまった。

◎林道に入り、大杉谷コースを登り始めた。1 時間ほど上がると、雪が少しずつ深くなっていく、雪のない季節はおだやかな登山道、よく手入れされた杉の植林地帯、もう 10 年もすれば切り頃かという立派な杉、枝うちがされ、下草も下枝もきれいにかたづけられている、今時めずらしい手入れがなされた杉の植林地帯。それから 30 分ほど登ってくると、先ほどは「なかなか 手入れが行き届いた 杉林」とっていたそのあとで、この辺りの杉林は手入れがされていない。下草どころかヒヨロヒヨロ灌木が生えてきている。大木の杉の隙間に、椿の葉っぱのような木、「何の木だろうね」と答えは出ないがたくさん生えている。道の反対側には、雪の中からシダの葉っぱ、緑が鮮やかにギザギザを見せている。この緑はきれいだ、白い雪の間から見え隠れする葉っぱはそれだけで元気がでてくる、鮮やかだ。シダの上には、雑木林、太いやつから細いやつ、でっかいやつから、ヒヨロヒヨロのやつまで、斜面にしがみついている。杉林は薄暗く陰気だけれど、雑木林は生きいき、樹の仲間たちのざわめきが聞こえそうで陽気だ。

◎道を間違え、愛宕山の本道である参道に出ってしまった。「道を間違える人」という言葉にたがえず、またやってしまった。二又があり、「どちらに行っても 同じところ」と思いきや、大杉谷の道しるべに進むべきだった。「ええい 飯に しましょうか」湯を沸かし、カップヌードル、おにぎり、饅頭に菓子、「甘露カンロ」である。

◎1 時間で山頂、あずま屋でトイレ休憩。50 センチぐらいの雪、五合目でマイナス 5 度、手の指が「いてて」というぐらいの寒さ、陽が照ったり曇ったり、空も白い曇り空と青空が半々。古いお寺の屋根にはたっぷりの雪、まわりの大きな木の枝にも葉にもたっぷりの雪、石灯笼にも、石の手すりにも、たっぷりの雪。空気が冷たい、ほてった身体に心地いい。

◎下山は月輪寺に向かう。みなさん軽いアイゼンを装着「オレは いいや」と何も着けずに下った。膝が完治していないので左足のかかとは力は入らない、いつものようにすいすい下れないがなんと転ばずに進めた、と思っていたが、二度、後ろ向きに思い切りひっくり返った。一度は前を見ず下ばかり見ていたら、目の前に胴体ぐらいの太い枝、おでこにごつり、思い切りすってんころり、「おおお 立てないねえ 笑っちゃうねえ」右の手を突こうにも、左の手を突こうにも立てない、本当に裏返った亀さんようである。もうしばらくすると、杖代わりのピッケルが、スルリ、ズボリ、雪の穴に入ってしまう、その勢いで身体まで後ろにスルリ、ズボリ、「おおお これもまた 立てないねえ」と二度の苦笑、今日はすってんころりの日である、「こういう 思い切った こけ方は 怪我がない」と言い訳しつつも、「澤山さんも よく ひっくり返っていたな」と思いだし笑い。さらに下ってくると、辺りがやや暗くなってきた、4 時を過ぎたぐらいかな、山は日暮れが早い、標高が下がって気温が温かくなってきた。上着を脱ぎ、オーバー手袋を脱ぎ、背中からは汗が流れる、足元の雪も上の方は硬かったのが、しっとり湿ってきた。

◎いつものようにすいすい歩けなかったが、膝が痛くなるようなこともなく、無事帰り着いた。「ちょっと膝にシップを貼りますので」と石の上に腰かけ、ズボン、タイツを足元まで下げ、膝の内側に湿布薬を貼った。スイと立つと、その部分がひりひり気持ちがいい、「なんとかヒザめ 最後まで持ってくれた 歩けた うれしいねえ しかし 正座ができるまで 早く完治をしなければ」茨木に帰り、反省会、昔、何度か来た次郎長なり、相・前・増・岡 4 人でした。

クラーナハ展<LUCAS CRANACH>展覧会が国立国際美術館でやっていた。この美術館、「オレは 入るのが 初めてなのか」と頭をかしげながら、「移転した できあがった 前を何度か通っている まさか 初めて」幻想というよりボケの世界、やはり初めて館内に入るようだ。どこから入るのか、迷いながら人のあとについて、大きな入口を入るとすぐにエスカレーター、「会場は どこ」「向こうのエスカレーターで 階下です」そう聞いた時、やはりここは初めてだと確信した。従弟の敬治さんが「中之島に移転する 阪大の跡地 空中権を売って 地下に作る」なんて話していたのを思い出す。上のフローでアレシンスキー展も見られた。アレシンスキーは素晴らしい、おおいに楽しんだ。

クラーナハという人のことは知識が全くなかった。今日は内覧会、招待客だけが見られる、カタログまでくれる、レセプションまである、「行かなくっちゃ」ということでやってきた。このレセプション、話が先走るが、クラーナハ展は人気があるらしく、会場全館で1000人を超しそうな人があふれている、入口からエスカレーターを降りる時、レセプション用のオードブルがカバーをかけられ置かれているのを見たが、100人分ぐらいの皿だった。従弟が万博の美術館にいたころは、現代美術ということもあり客も少なかった、100人ぐらいの招待客には、アルコール類もたっぷりあり大いに楽しんだが、今回は見終わって上がってみると皿の上には一切何もなし、お茶類が少し並べられていた。オレはジュースをいただいて帰った。話は会場に入った時点に戻るが、クラーナハという人の絵は初めて見る、招待状の中のパンフレット、町に張られたポスターなどで、中世のヨーロッパの絵描き、裸婦が面白い、ぐらいの知識でまずは見ていった。あいさつ文も解説文も読まずフラリフラリと人のいない場所から絵を見入った。「父 と書いてある親子で描いていたのか」「1500年と書いてある 油絵と書いてある」「えええ これは 本人の絵じゃないね ピカソがある 現代美術家のものもある」てなことでもう一度入り口から入りなおした。

クラーナハは1500年代のドイツの画家、宮廷画家になり、工房の主になり、息子も描いていた。この人の絵じつくり味わうと、人体のゆがみ、顔のゆがみが上手い、面白い、魅力的だ。肖像画も、物語の絵も、神の絵も、人物像がデフォルメされ、そのセンスが光っている。油絵というが、最近出来上がったと思えるぐらいに鮮やかできれい。保存修復作業で相当苦労したのかもしれないが、亀裂も少ない、汚れも少ない、画面がみずみずしい。息子の絵は、上手い、きれい、明るい、いい絵だけれど普通の絵だ。

クラーナハの独特のデフォルメ、鼻がきゅんと上にあがって、顔がふによっとゆがんで、体がぼろりてこぼこして、手なんかもありえないねというぐらいに長かったり、腹がぼてりんと出ていたり、胸が乳がけったいなところについていたり、そういうデフォルメが妙に面白い。絵はクラシックの絵というわりには、新鮮できれい、描かれた顔も、最近どこかで見たようなという雰囲気だ。1500年代にはもう油絵があったのか、オレも詳しいことは忘れてしまったが、油絵の具が考え出された最初の頃なのかねえ。絵は生き生きして、最近描いたのかというぐらいにきれいで明るい。よく見るヨーロッパの宮廷画家の絵、バックの暗い画面の上に、油絵で、がっちりしっかり王様なり女王様が描かれ、写真さながらに浮かび上がっているというのが相場だが、クラーナハの絵は、それに比べ、なんだかおどろおどろしい画面の中に、王様なり女王様が、ゆがんでこちらを見ている、という魅力だ。

会場を出るとき 分厚いカタログをいただいた。朝日新聞が同封され、なかほどにクラーナハ展のページがあったので紹介します。「危険な香りに誘われて」「冷たい視線 独特の裸体 新たな美作り出す」「華やかな衣装も楽しんで」と見出しが躍る。<危険な香りのする女。そんな言葉が似あうような、不思議なまなざしの女性像を数多く描いたことで知られるルカス・クラーナハ(1472~1553)は、ドイツのルネッサンス期を代表する・・・。中略 首を切断された男の顔はリアルに描写され、苦悶の表情が生々しいが、一方、男を殺した張本人である貴婦人の顔に目を移すと、まるで人形のように、表情が読み取れない。中略 作品の主題は、聖書に登場する「アダムとイブ」や、古代ギリシャ・ローマの神話の登場人物、老いた男性が若い女性の愛を金で買おうとする「不釣り合いなカップル」など世俗苦的なテーマまで多彩だ。中略 作品を見ていくと女性のプロポーションが独特なことに気づく。当時のイタリアでは、ギリシャ・ローマ時代の古代彫刻のような理想的な体を描くことが主流で、その影響はドイツにも及んでいる。中略 豪華な装飾品や透けるベールとのとの取り合わせが煽情的でなまめかしい。>